

新商品 ドン・ボスコ社オリジナル サレジオ会日本黎明の地 宮崎から

チマッティ神父が愛した みやざき茶

チマッティー

Cimatti × Tea 煎茶

「お茶で皆、健康です」 (1926年7月31日の手紙より)

1926年2月、宮崎の地にイタリアからサレジオ会の宣教師団がやってきました。団長のチマッティ神父は、ゆく先々でふるまわれる日本のお茶に関心をもち、お茶についてのエピソードをたびたび手紙に綴りました。自らも茶を摘み、お茶と共にある日本の文化を大切にしたいチマッティ神父の姿を心に思い描きながら、チマッティーをぜひご堪能ください。

新緑のような香り、
すっきりとした旨みの浅蒸し煎茶です。



一煎茶ティーバッグ
1個 180円 (税別)

水出しもOK!

箱入り5袋セット
(ティーバッグ5個入)
1個 900円 (税別)

マイボトルにも
使いやすい
紐なしテトラパック

DBK
ドン・ボスコ基金
販売の一部はドン・ボスコ基金をとおして国内外の特に助けを必要とする青少年の保護育成プロジェクトに寄付されます。
※別途送料がかかります。※卸売も可能です。別途ご相談ください。
※パッケージ画像はイメージです。実際の商品と異なる場合があります。

2025年4月より新発売!

右記QRコードのフォームより
予約注文を受け付けております



販売元 **ドン・ボスコ社**
カトリック・サレジオ会出版事業部
Tel. 03-3351-7041 Fax. 3341-5429

サレジオ会来日100周年に関する情報はこちら

100周年記念
公式サイト
<http://www.oratorio.tokyo/>



ドン・ボスコの風
インスタグラム
<https://www.instagram.com/dbnokaze/>



ドン・ボスコの風 アヴァンティ no.1

2025年2月8日発行

編集人 岡本 大二郎
発行人 濱崎 敦
発行所 サレジオ会日本管区本部
「ドン・ボスコの風」編集事務局
〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22-12
電話:03-3351-7041 Fax:03-3341-5429
Eメール: dbw@salesians.jp
編集・デザイン制作 ドン・ボスコ社
印刷所 株式会社プリントパック

本誌掲載の記事、写真、イラストの無断転載を禁じます。
© サレジオ会日本管区本部 2025

「ドン・ボスコの風」について

「ドン・ボスコの風」はサレジオ会創立者ドン・ボスコが1877年に創刊した「Bollettino Salesiano」の日本語版。サレジオに関わる人びとの生き方や活動を紹介し、サレジオ家族の絆を深めるサレジオ会広報誌です。

note版「ドン・ボスコの風」https://note.com/db_no_kaze

サレジオ会日本管区が管理人を務めるサレジオ家族のウェブ版オラトリオ(学び舎)です。若者と、共に歩むすべての人が、学び・つながる場として、皆さんと一緒に作っていく発信スペースです。サレジオ家族の様々な人や場所、事柄を随時紹介しています。



Salesian Bulletin Japan

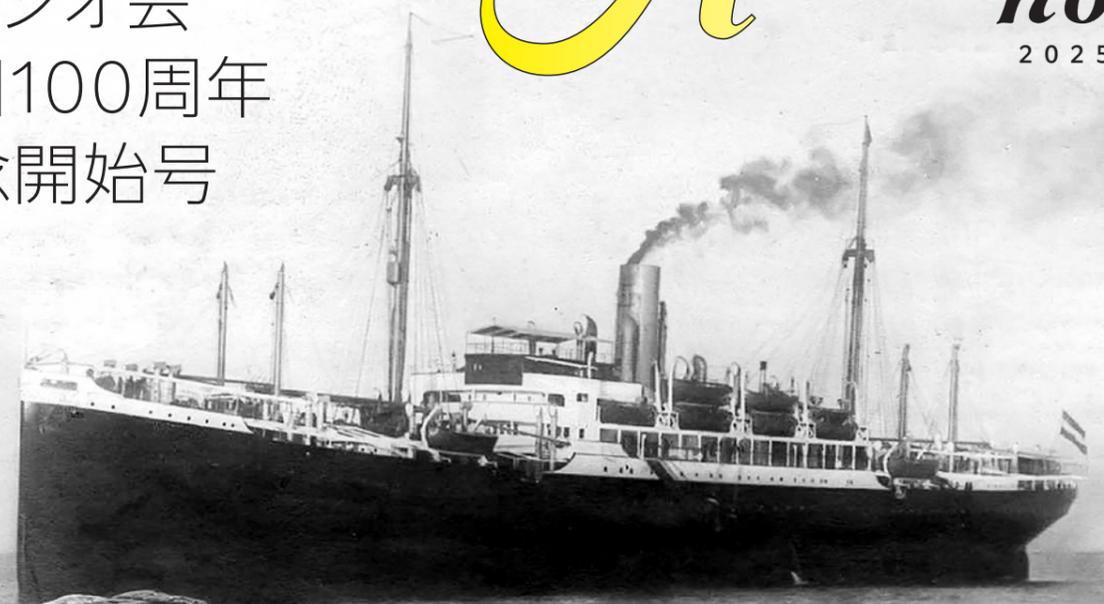
ドン・ボスコの風



Avanti
アヴァンティ

no.1
2025.2

サレジオ会
来日100周年
記念開始号



サレジオ会初の日本への宣教師団が乗船したドイツの貨客船フルダ号

「神に感謝! 日本万歳!」

1926年、チマッティ神父が日本に上陸した際、イタリアに送った手紙の一文です。

それから100年、初期の宣教師たちをはじめ、

多くのサレジオ会員、サレジオ家族、信徒、協働者、そして子どもたち・若者たちが

日本でのサレジオの歴史を紡いできました。

そして、今こそチマッティ神父の言葉を胸にゆきましょう、

未来へ向かって!

進みなさい!
「Avanti!」



日本へ宣教師団を派遣した当時の
総長フィリッポ・リナルディ神父

目次

ご挨拶 サレジオ会日本管区 管区長 濱崎敦 神父

行事予定 2025年2月~2026年2月

100周年ロゴコンテスト 最優秀賞が決定!

宣教師を迎えた日本の玄関口 「門司港(福岡県)」

みやざき茶「チマッティー」のご紹介



サレジオ会来日100周年

記念期間: 2025年2月8日~2026年2月8日

サレジオ会日本管区
管区長

はまさき あつし
濱崎 敦 神父



フルダ号にて。宣教師団の9人と上原専禄氏

2025年。サレジオ会来日100周年に向けた準備の1年間がスタートしました。

今年は記念すべき年が重なっています。

ひとつは25年に一度の聖年を迎えていることです。2024年12月24日の聖年開幕にあたってフランシスコ教皇は聖なる扉を開け、こう告げました。「この聖なる大聖堂の敷居を越え、いつくしみとゆるしの時に入ろう。すべての人に、^{あざむ}欺くことのない希望の道が開くように」と。

もうひとつは、1875年にドン・ボスコが南米に最初の宣教師を派遣してから150年目を迎えることです。その最初の派遣から50周年を記念した1925年12月29日、チマッティ神父を団長とする9人のサレジオ会員たちがイタリア・ジェノヴァから日本へと派遣されました。当時のサレジオ会総長は福者フィリッポ・リナルディ神父で、まるで聖人から聖人への美しいバトンリレーであるかのように1926年2月8日、派遣団は日本に到着したのです。そうした歴史の流れを受け、私たちは今、サレジオ会来日100周年を祝おうとしています。副総長ステファノ・マルトリオ神父は言います。「宣教師派遣の記念日を祝うことは、私たちがこの出来事の意味を思い出し、未来に立ち向かい、新たな世界を築く力を得ることを可能にします」と。

この大きな祝福の年を迎え、大切にしたい3つの言葉があります。それは「感謝」、「再考察」、「再出発」です。

感謝

宣教師たちが家族のもとを離れ祖国を立ち、命をかけて日本に福音の種を蒔いてくださったこと、多くの犠牲のうえにドン・ボスコを伝えてくださったことへの感謝です。神の大きな計らいとたくさんの恵みに感謝いたします。

再考察

時代は移り変わってゆきます。そのたびに築き上げてきたことへの反省やゆるし、再確認など、さまざまな作業が必要です。福音を生きることに常には新しい生き方が求められ、カリスマに忠実であることはすなわち変化を恐れないことからです。変えてはならないものに忠実であるために、変わることへの勇気と謙虚さが必要であると考えます。「忠実さには、神から来る視点と“時のしるし”を読むことへの従順を通して鍛えられる能力とが含まれています」(2025ストレンナより)。

再出発

はるか先を見据え、新しい挑戦を歓迎し、希望をいだいて使命を再起動することは、まさに聖年のテーマ「希望は欺かない」と呼応します。希望に錨をしっかりと降ろして、若者とともに新しい時代に向かって進んでいきたいものです。

行事予定

※予定は変更になる場合があります。詳細は100周年記念サイトまたはドン・ボスコの風Instagramでご確認ください。

2025年

2月8日(土) 14:00~18:00

100周年記念オープニングイベント(調布)

10月4日 チマッティ・デー

11月 中高生の集い

~~12月 2026年1月 協働者のイタリア巡礼~~

2026年

~~2月7日 若者の集いwith新総長(場所未定)~~

2月8日 100周年記念ミサ

クロージング@東京カテドラル(予定)

100周年記念公式ロゴコンテスト

最優秀賞が決定!

2024年10月から11月にかけて、サレジオ会来日100周年記念の公式ロゴを決めるコンテストが行われました。サレジオ工業高等専門学校デザイン科の学生たちから22作品の応募があり、選考の結果、優秀賞として7作品が選ばれ、その中から、サレジオ家族の若者を対象に行われたWEB投票で最優秀賞が決定しました。

最優秀賞

サレジオ工業高等専門学校
デザイン科4年 坂東礼美さん

受賞者コメント

「このたびは、私のデザインした100周年記念ロゴが最優秀賞をいただき、大変光栄に思います。このロゴが、サレジオ会の



100年の歩みを祝うだけでなく、これからの未来へと続く希望の光となることを願っています。今後も、ドン・ボスコの精神を大切にしながら、より多くの方々に愛されるようなデザインを作り続けていきたいと思っています。」

ロゴのコンセプトについては、「ドン・ボスコとチマッティ神父の顔をイラストチックにかわいらしく単純化し、100の数字の中に取り入れました。100周年を祝うロゴなので、カラフルに華やかに、見ただけで幸せになれるようなデザインにしました。また、青少年に親しみやすく、青少年のように色鮮やかに仕上げました」と説明しています。

2025年2月8日の100周年記念オープニングイベントにて、最優秀賞の表彰および優秀賞受賞者への記念品の贈呈が行われます。最優秀賞および優秀賞に選ばれた7作品は、下記サイトからご覧いただけます。

100周年記念サイト ロゴコンテスト

<http://www.oratorio.tokyo/index.php/logo-contest/>



宣教師を迎えた日本の玄関口

も じ こ う
門 司 港

福岡県北九州市門司区港町



大正の終わり、1926年の2月8日朝8時。イタリアからの宣教師団の団長だったヴィンチェンツォ・チマッティ神父を乗せたドイツの貨客船フルダ号は、当時国際的な貿易港として栄えていた門司港に到着しました。日本語を知らないイタリア人たちにはその後の九州鉄道への乗り換えが困難でしたが、船内で出会ったウィーン留学帰りの日本人^う原専禄氏(のちの一橋大学学長)が、親切にも門司駅まで案内してくれたのです。

門司の町は横浜や神戸と並び三大貿易港として多くの船が入り出していたため、街にはハムやチーズ、チョコレート、洋酒など当時ではめずらしいものが店頭並び、博多や小倉から買い物客が訪れていました。料亭や花街、映画館でにぎわい、街は人びとであふれ返っていました。

門司港地区は古くは漁と塩田の小さな村でした。平安時代の壇ノ浦の戦い(源平合戦)の戦場など歴史的な要所、九州と本州、日本と大陸を結ぶ海運の拠点でもあります。明治から昭和にかけて石炭やセメントの輸出、造船の拠点として発展し、その後さまざまな産業の中心地となりました。



1929年頃の門司駅(現在のJR門司港駅)

九州鉄道が国営となり、その終点地として門司駅が開設。近隣の棧橋通り周辺には三井物産や大阪商船などの大手商社の支社、日本郵船の出張所、日本銀行などの支店が立ち、九州の金融中心地となります。

1942年(昭和17年)の関門鉄道トンネル(海底トンネル)開通後は中心駅が移転し、門司港駅に改称。戦後の日本の発展とともに関門海峡大橋が開通。これを機に街は衰退し、後に「門司港レトロ」として商社跡や工場跡を観光地として再整備。歴史的建造物や観光施設、宿泊施設、商業施設が立ち並び、年間200万人が訪れる憩いの場として親しまれています。

門司港レトロ公式サイト

<https://mojiko-retoro9.jp/>

